

平成 23 年度 東京都写真美術館自主企画展

畠山直哉展

Natural Stories ナチュラル・ストーリーズ

会期 平成 23 年 10 月 1 日 (土) ~ 12 月 4 日 (日) 56 日間

会場 東京都写真美術館 2 階展示室

主催 公益財団法人東京都歴史文化財団 東京都写真美術館 産経新聞社

助成 芸術文化振興基金

協賛 ニコン/ニコンイメージングジャパン/東京都写真美術館支援会員

協力 DNPアートコミュニケーションズ/タカ・イシイギャラリー

後援 サンケイスポーツ/夕刊フジ/フジサンケイビジネスアイ/iza!/SANKEI EXPRESS



テリル #02607 2009

風景は、そこに実体として存在していたものではなく、僕たちが詩を詠んだり、写真を撮ったりすることによって初めて、僕たちの眼前に価値ある姿として現れてくるものだったのです。(中略) 僕たちは、この真っ暗な世界で、言葉や写真を灯火のようにして、次の一步を踏み出さなければなりません。その一步を踏み出す行為のみが、生存を意味するということを、僕たちは誰もが心の深いところで知っているからです。

畠山直哉 (eyes vol.70 より抜粋)

展覧会概要

東京都写真美術館では、日本を代表する写真家の一人として、海外にも広く紹介されている畠山直哉の個展を開催いたします。今回は「Natural Stories ナチュラル・ストーリーズ」と題して、初期から現在に至るまでの仕事のうち、自然と人間との関わりを改めて俯瞰するような作品を中心に構成します。現在まで畠山は、石灰岩や石炭といった鉱物資源に関わる工場や鉱山、その跡地などを捉えたシリーズを制作してきました。そこには、普段あまり人が見ることのない、壮大で、時には畏怖を感じさせるような光景が写し出されています。自然の美しさだけでなく、時には不条理で厳しさも突きつけられるような今回の作品展示は、自然と人間が長い年月をかけてどのように共存し対峙してきたかを考えるきっかけになるでしょう。



左) アトモス #07303 2003 右) アトモス #03407 2003

本展の主な見どころ

① 畠山直哉の個展を首都圏の美術館で初めて開催！

国内外で数多くの個展を開催している作家の、首都圏の美術館における初めての個展です。

② 自然と人間との関わりを俯瞰する風景の作品を中心に、136 点を展示

「ライム・ヒルズ」「Ciel Tombé (シエル・トンベ)」のほか、国内初展示の「Terrils (テリル)」、映像による「BLAST (ブラスト)」、陸前高田を捉えた作品を含む、代表作から初公開の近作・新作まで全 136 点を展覧します。いま私たちは自然に対してどのような思いを持っているのでしょうか。畠山が撮り続ける自然と人間の関わりとは？その核心に迫ります。

③ 陸前高田市を捉えた作品は、初のパーソナル・ヒストリーの展示

「展示にパーソナル・ヒストリーを含めるのは初めて」と畠山が語るように、本展では、生まれ育った岩手県陸前高田市を捉えた作品を展示します。2011年3月から撮影した作品および、それ以前に撮影されたものも含め、新しい畠山の取り組みを紹介します。

④ カメラ・オブスクラによるドローイングを展示

カメラ・オブスクラを使い、作家自らが描いたドローイングを展示。自身の撮影ポジションや制作風景を俯瞰するドローイングは、“自分の外の世界を再構成する”という考えを実践したものです。

出品される主なシリーズ

※詳細は別紙の作品リストをご参照ください

「ライム・ヒルズ」

「ライム・ヒルズ」は石灰岩の採掘場の風景をとらえたもので、削り取られていく岩山や工事車両の行き交う道路がダイナミックで静謐に描写されています。

ライム・ヒルズ LH02704 1989



「BLAST(ブラスト)」

石灰岩の山の取材中に、ダイナマイトで発破する風景を出会い、そのダイナミックで計算された瞬間をとらえた作品。遠隔操作で一気に36枚撮影された写真は、人間の目が捉えることのできない時間を描写しています。プリント作品に加え、約300インチの大画面による映像を初展示します。



ア・バード、ブラスト #00130 2006

「Ciel Tombé(シエル・トンベ)」

近年のシリーズの作品で、パリの東端のヴァンセンヌの森地下にある地下採石場を撮った作品です。「Ciel Tombé (シエル・トンベ)」は地下採石場跡の天井が剥れて落ちている状態を指す用語です。中世から近代まで続いた採掘によって、地下にぽっかりと空いた空間は、一部は天井が崩れ落ち、一部はドームのようになっており、まるで地下都市の廃墟のように見えます。



シエル・トンベ #04414 2007

「Terrils (テリル)」

フランスのぼた山（石炭ガラを集積させた山）を中心にその周辺の風景を捉えた作品です。これらの山は人為的に作られた山でありながら、周囲の風景の中で確固たる存在感を見せています。ピラミッドのようなモニュメントとは異なる性格のものですが、そこで働いていた人、その炭鉱の周辺で生活していた人の記憶と痕跡が降り積もった山ともいえるのではないのでしょうか。



テリル #06409 2009

**展覧会カタログへの執筆を依頼するために、畠山氏が小説家のフィリップ・フォレスト氏
に書いた1通の手紙をご紹介します。**（広報誌 eyes vol.70 に掲載した全文を再掲載）

「ナチュラル・ストーリーズ」(P・F への手紙より抜粋)

畠山直哉

現在まで、僕は主に風景写真を撮ってきましたけれど、長い間の実践を通じて学んだことはといえば「上手に風景を撮る」などという技術的なことではなく、むしろ僕の風景への関心というものが、写真を撮ることによって生じていたものであったということでした。この逆説に気がついている人は、実は多いはずですよ。

風景は、そこに実体として存在していたものではなく、僕たちが詩を詠んだり、写真を撮ったりすることによって初めて、僕たちの眼前に価値ある姿として現れてくるものだったのです。それが美しく心む姿であれ、冷酷でおぞましい姿であれ、目の前の自然が風景として現れるとき、自然は僕たちによって意味を付与され、価値付けをされているものだと言えます。

風景を現出させるために自然に働きかけるのは、いつも僕たち人間です。その働きかけは常に一方的であり、逆に自然が人間に働きかけ、風景を現出させるということは、決してあり得ません。なぜなら自然とはその定義上、人間の原理を超えて現象しているものことなのですから、人間のことなど一切お構いなしなのです。この自然の持つ、人間に対する無関心さは徹底しており、その冷酷な面については、例えば僕たちが人の死に出会う際に、よく実感されます。

人の死といった、あまりにも冷酷な、自然の人間に対する無関心さを思うとき、僕たちは自らの人生にも思いを馳せます。自らが生まれ、今こうしており、やがてあの人と同じように死んでゆくだろう。その現象を肉体＝自然と呼ぶなら、その自然は、人間としての僕たちに対しては沈黙を通し、何も語りません。この深い沈黙に接すると、僕たちの内には「生まれてきたこと、生きていること、死んでゆくことに理由はない」といった、やるせない感慨も生じてくるでしょう。

でも僕たちはいつも、死を畏れ、死に対して抵抗を図り、できる限り生きようとしめます。自分の人生に意味を与え、自分の人生の価値を高めようとしめます。こういった欲求のどこからどこまでが生理的、生命的なもので、どこからどこまでが人間的、文化的なものなのかを知るのは難しいですが、いずれにしろこの欲求がなければ、僕たちの生存はたちまち叶わないものとなるでしょう。

自然の人間に対する無関心さに抗うために、そして今日を生存してゆくために、自然に対して、人間の側から一方的にであっても、意味を産出し付与する行為が、僕たちには必要になります。それを物語行為と呼んで、どこが間違っているのでしょうか？ 風景を生み出すことと同じように、自然との間に物語を生み出すことが、僕たちには必要なのです。

とは言っても、近代以降の科学的世界観の蔓延によって、自然との間に、神話や宗教のスタイルを取った物語を生み出すことには、無理が生じるようになりました。山を地質学的に理解し、月を天文学と物理学によって理解し、花の色彩や造形を昆虫との関係から理解してしまった僕たちには、大昔からの、たとえば「誰がお日様

を作ったか」といったようなスタイルによる、神話的、宗教的な物語を繰り返すことは、もうできません。

神話や宗教のスタイルで物語を繰り返すことはもうできない。この認識は、近代の人間に深い寂しさと苦悩をもたらしたでしょうが、しかしその寂しさと苦悩ゆえに、近代の芸術や文学は、人類がいまだたどり着くことのなかった世界の深淵にまで、どんどん降りてゆくことができたのだらうと思います。その長い歩みの総体を、あなたの国では「歴史 (histoire)」という、「物語」と同じ言葉で呼んでいますね。

果たして僕たちは、世界の底にまでたどり着いたのでしょうか？それとも、まだまだ深いところまで、これからも降りてゆかなくてはならないのでしょうか？それとも、すべてを諦めて、昔いた場所へと引き返すべきなのでしょう？いずれにしろ僕たちは、この真っ暗な世界で、言葉や写真を灯火のようにして、次の一步を踏み出さなければなりません。その一步を踏み出す行為のみが、生存を意味するということを、僕たちは誰もが心の深いところで知っているからです。

でも、次の一步をどこに踏み出せばよいというのでしょうか？右か左か、前か後ろか。いずれにしろそれは僕たちが決めることです。その一步を踏み出すためには、たいへんな力が必要でしょうが、その力は、僕たち一人ひとりがあらかじめ抱いている「物語」から、きっと授けられるはずです。そして、僕たちがついに踏み出すとき、その一步と「自然」との出会いにおいて、別の新しい「物語＝歴史」が、そこにはきっと現れるはずです。

今度の展覧会では、岩石や鉱物を扱ったものが多く出品されるでしょうから、なんとなく自然史博物館 (ナチュラル・ヒストリー・ミュージアム) の展示物を連想させるような内容になりそうな気がしています。でも、もし歴史と物語がもともとと同じ言葉であるというのなら「ナチュラル・ヒストリー」の「ヒストリー」は「ストーリー」でもあるわけで、いつその際、複数形で「ストーリーズ」と書き換えてみてはどうかと思っています。「自然についての物語」あるいは「自然な物語」といった字義通りの意味の向こうに「自然史」が連想されればと思っているのです。

沈黙する自然に対して呼びかけても、返ってくるのはこだまになった自分の声だけかもしれません。でもこのこだまを集めて、僕なりの物語として編むことが、今は必要な気がしているのです。
(2011年5月)

ヴェストファーレン炭鉱 I/II アーレン
#00276 2004



作家プロフィール

畠山 直哉（はたけやま なおや）

1958年、岩手県陸前高田市に生まれる。1984年筑波大学大学院芸術研究科修士課程修了。在学中に大辻清司の影響で本格的に写真始める。1997年に第22回木村伊兵衛写真賞、2001年にヴェニス・ビエンナーレの日本代表の一人に選ばれている。同年、第42回毎日芸術賞を受賞。2003年に日本写真協会年度賞を受賞。

関連イベント

■作家とゲストによる対談

①畠山直哉×大竹昭子（文筆家）

日時：10月2日（日）15:00～16:30 会場：2階ラウンジ

②畠山直哉×池澤夏樹（作家）

日時：10月25日（火）18:30～20:00 会場：1階ホール

※展覧会チケットの半券をお持ちの方は、どなたでもご参加いただけます

※当日午前10時より1階受付で整理券を配布します（整理番号順入場、自由席）

■作家によるフロアレクチャー

日時：10月7日（金）18:30～

※展覧会チケットの半券（当日有効）をお持ちの上、展示室前にお集まりください

■担当学芸員によるフロアレクチャー

展覧会担当学芸員による展示解説を行います

日時：会期中の第1、第3金曜日 14:00～

※展覧会チケットの半券（当日有効）をお持ちの上、展示室前にお集まりください

展覧会カタログのご案内

「Natural Stories ナチュラル・ストーリーズ」

ほぼすべての出品作品（陸前高田、ブラストの映像作品は部分のみ）と、畠山直哉氏（出品作家）、フィリップ・フォレスト氏（小説家）、藤村里美（担当学芸員）によるテキストが掲載された展覧会カタログです。

産経新聞社発行、B5変形版 2500円（税込）

※ミュージアムショップ ナディップ X10（03-3280-3279）にて限定発売

※そのほか、9月に「Ciel Tombé」（出版：スーパーラボ info@superlabo.com）、
「Terrils」（出版：タカ・イシイギャラリー tig@takaishiigallery.com）が出版されました。詳細は各出版元までお問い合わせください

開催概要

展覧会名 畠山直哉展 Natural Stories ナチュラル・ストーリーズ
会 期 2011年10月1日(土)～2011年12月4日(日)
会 場 **東京都写真美術館** 2階展示室
〒153-0062 東京都目黒区三田 1-13-3 恵比寿ガーデンプレイス内
ホームページ www.syabi.com 電話 03-3280-0099

開館時間 10:00～18:00(木・金は20:00まで)、ただし10/28(金)・29(土)
は21:00まで開館 ※入館は閉館の30分前まで

休館日 毎週月曜日(ただし月曜日が祝日の場合は開館し、翌火曜日休館)

観覧料 一般 700(560)円/学生 600(480)円/中高生・65歳以上 500(400)
※()は20名以上団体料金、東京都写真美術館友の会会員 ※小学生以下および
障害者手帳をお持ちの方とその介護者は無料 ※第3水曜日は65歳以上無料

交通機関 JR 恵比寿駅東口より徒歩7分/東京メトロ日比谷線恵比寿駅より徒歩10分
※当館には専用の駐車場がございません。お車でご来館の際は近隣の有料駐車場をご利用
ください。

お問い合わせ

東京都写真美術館 事業企画課
〒153-0062 東京都目黒区三田 1-13-3 恵比寿ガーデンプレイス内
電話 : 03(3280)0034 FAX : 03(3280)0033

展覧会担当 藤村 里美 s.fujimura@syabi.com
田坂 博子 h.tasaka@syabi.com

広報担当 久代 明子 a.kushiro@syabi.com
平澤 綾乃 a.hirasawa@syabi.com
前原 貴子 t.maehara@syabi.com

このリリースに掲載している図版をプレス用にデータでご用意しております。
上記、広報担当までお申し出ください